「指導案作成支援システムの構築」

開沼太郎（大阪大谷大学 教育福祉学部）

本報告の概要（メニュー）

1. 問題の所在
2. システム構築の目的（ねらい）
3. システムの運用および実践の概要
4. システムの教育的効果と課題
5. 本報告のまとめ（結論）

大阪大谷大学 Osaka Ohtani University

従来の「職人芸伝承型」指導案作成

- 指導者や事例の個体差の影響大

→教育実習のような初期段階からの
指導・支援の一貫性確保が困難

- 「学習指導要領」や「指導書」、教官の指導等に依存する採長補短的「つまみ食い」状態

→指導計画における
「論理的整合性」の意識づけの確保が困難

大阪大谷大学 Osaka Ohtani University

「指導案作成支援システム」のねらい

- 各項目間の「(論理的) 整合性」に着目
  (児童観、教材観、指導観、目標、評価、・・・)
- 自動作成ではなく、作成"支援"を想定
  (思考チェックや作成ポイントの認識学習)
- 実習校指導との連携・実習ビデオ教材との連動
  (データベース化→自己増殖型eラーニング)

↓

"職人芸"的伝統 との融合

現代GP Project

大阪大谷大学 Osaka Ohtani University

「指導案作成支援システム」の特徴

- 実践と理念の「整合性」確認

  例：この活動で子どもに「つけたい力」は？

  教員は何のために支援を行うのか？

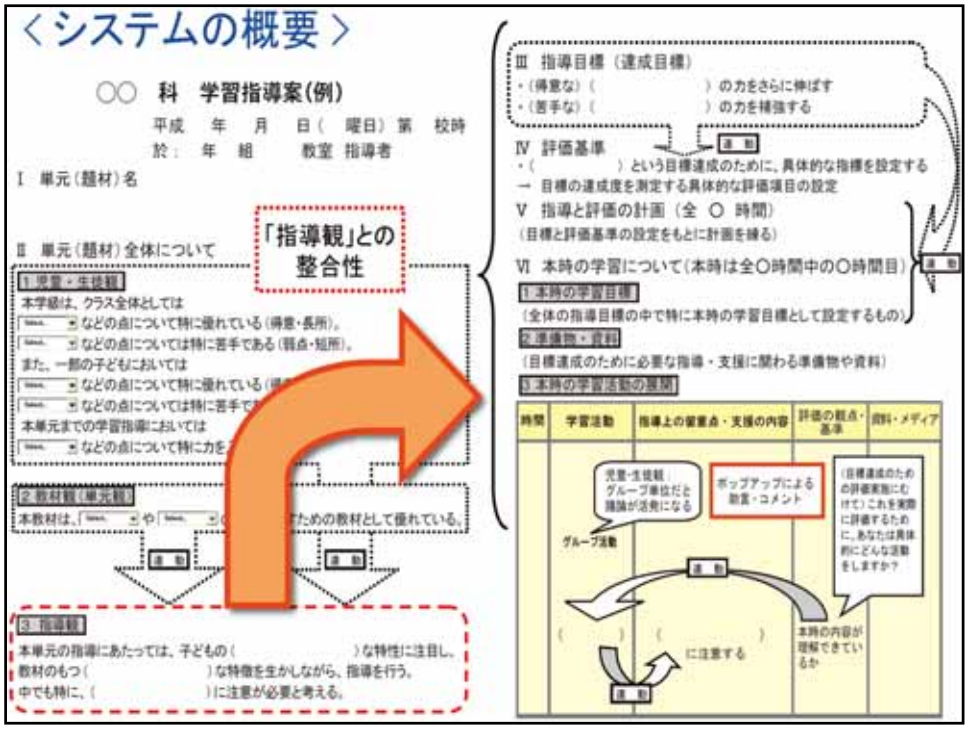
  （「ねらい」や「評価」との関連性）

  ・・・「学習指導要領」や「指導要録」などとの

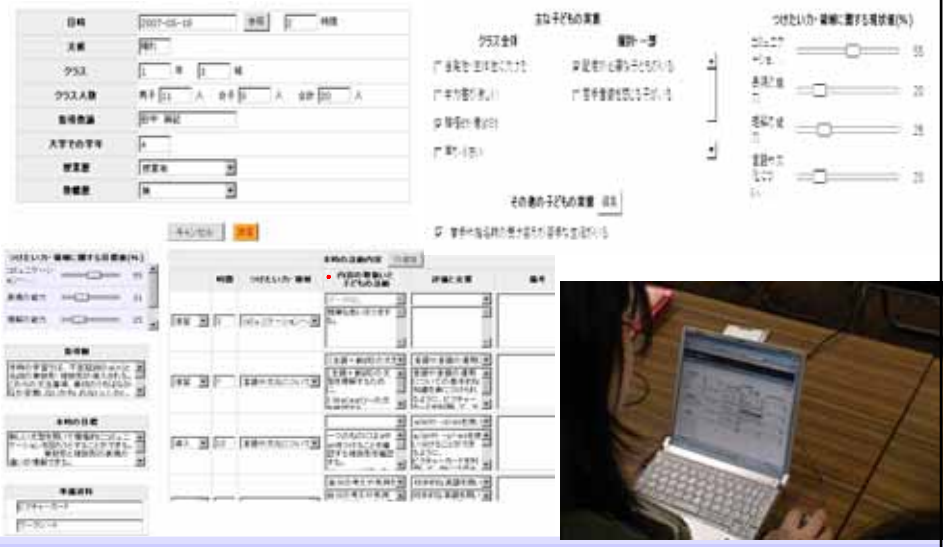
  関連性を意識させる　（**項目間の紐付け**）
- 計画・実践・評価の「整合性」確認

・・・パラメータ・事後評価入力、実習ビデオとの連携

現代GP Project



指導案情報入力画面（イメージ）



運用後 追加・強化された機能

- 「整合性」確認機能の発展・強化
（時間配分と力配分、児童観と活動内容、など）
→「誘導型支援」から「自己確認型支援」へ発展
・・・指導案出力時の確認「チェック」機能

- データベース機能の充実：「次世代教材化」
（簡易検索機能搭載、校種・科目データ拡充）

大阪大谷大学 Osaka Ohtani University

教育的効果の検証

＊「システム活用の有無」「実習経験の有無」に応じて、指導案作成･評価にいかなる差異が生じるかを比較分析

- 指導案　X　(非単元型･手本無･システム活用)
- 指導案　Y　(単元型･手本有･システム非活用)

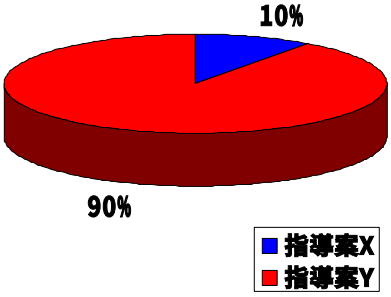
- 評価群　A　(実習未経験者 ･ 有効回答数 10)
- 評価群　B　(実習経験者　 ･ 有効回答数 10)

現代GP Project

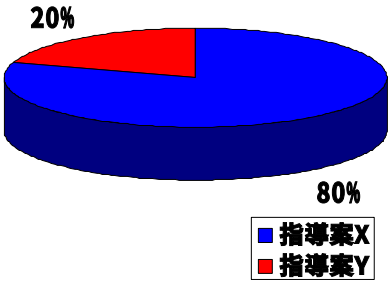
大阪大谷大学 Osaka Ohtani University

Q.活動のねらいや指導の流れなどがわかりやすいのは？

評価群　A



評価群　B



現代GP Project

大阪大谷大学 Osaka Ohtani University

「Q.わかりやすさの理由」にみる評価群の特徴

＊評価群　A＊

- 約半数が「学習者」の観点から評価
- 書式･形式へのこだわりが強い

（指導計画、生徒観･教材観･指導観の切分けなど）

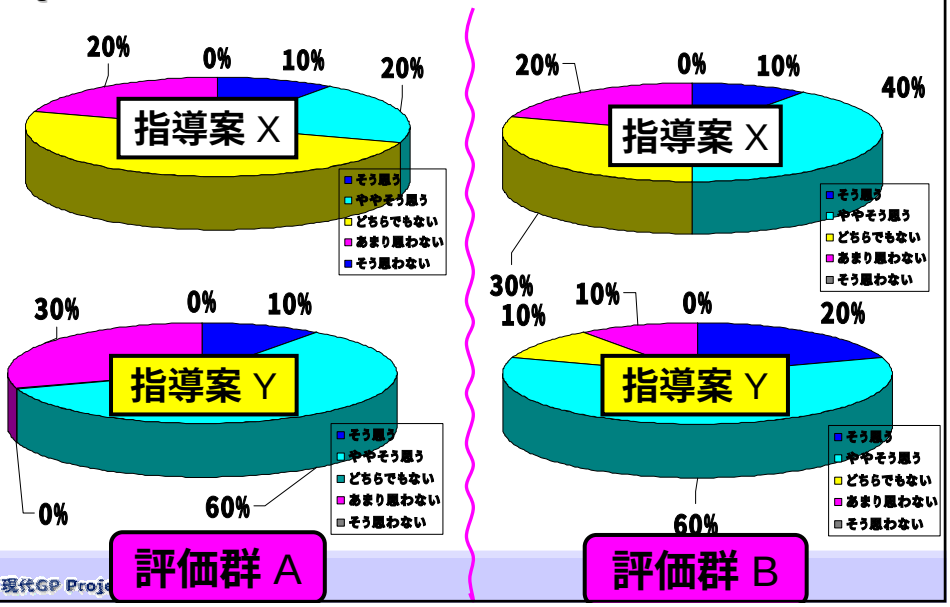
＊評価群　B＊

- 生徒観･教材観･指導観の明快さ＝整合性
- 書式･形式　＜　実態のわかりやすさ

現代GP Project

大阪大谷大学 Osaka Ohtani University

Q.活動のねらいを明示した方がわかりやすいか？



現代GP Proj

大阪大谷大学 Osaka Ohtani University

相関分析の結果と傾向

- 評価群 A

  指導案X･Yのわかりやすさの選択は、指導案Xのねらいの読み取りと関連している

  (中程度の相関：R= 0.46)

- 評価群 B

  指導案X･Yのわかりやすさの選択は、指導案Yにおけるねらいの読み取りと強い関連がある

  (強い相関：R= -0.84)

現代GP Project

大阪大谷大学 Osaka Ohtani University

本報告のまとめ

- 指導･支援の一貫性確保　(タテの整合性)

･･･作成済指導案のデータベース化

→次世代教材化 (自己増殖型eラーニング教材)

- 「論理的整合性」の意識づけの確保 (ヨコの整合性)

･･･システムを活用することで、「何のために」活動を行うのか＝活動のねらいの意識づけが向上

→教育経験があるほど書式･形式へのこだわりから活動の論理的整合性へと視点の転換が生まれる

現代GP Project